

日本道德教育方法学会 第8回オンラインセミナー報告

私の授業づくりと授業実践 Part3

—中学校の道德科の授業づくり—

第8回オンラインセミナー「私の授業づくりと授業実践 Part3」をふりかえって

島 恒生（畿央大学）

日本道德教育方法学会オンラインセミナーの第8回「私の授業づくりと授業実践 Part3」が、2023年8月27日（日）13時から行われました。

授業づくりと授業実践に関わるオンラインセミナーは、2021年度の第1回と2022年度の第4回で、小学校における道德科の授業づくりについて取り上げてきました。そして、今回の2023年度の第8回では、中学校の道德科の授業づくりに焦点を当て、中学生にとって魅力的な、中学校ならではの授業の在り方や進め方について議論を深めました。

谷田増幸会長（兵庫教育大学）のご挨拶に始まり、発表1では橋本舞佳会員（千葉県柏市立大津ケ丘中学校）に、発表2では増田千晴会員（愛知県犬山市立犬山中学校）にご登壇いただき、それぞれの実践発表ならびに質疑を通して中学校での道德科の授業づくりで大切にしている考え方や具体的な工夫について考えました。そして、高宮正貴理事（大阪体育大学）による「まとめ」と飯塚秀彦研究委員長（長野大学）による閉会あいさつが行われました。

なお、全体進行は、島が務めました。

参加者は、39名で、そのうち15名からアンケートの回答をいただきました。今回のオンラインセミナーについて「非常に満足した」「満足した」が14名、「どちらでもない」が1名、今回のオンラインセミナーの内容で自身の実践や研究に役立つところが「非常にあった」「あった」も14名、「どちらでもない」が1名と、よい評価をいただきました。

参加者からいただいた感想をいくつか紹介します。

- 中学校の現場で、問いや道德的な問題を考え続けることが重視されている点がよく分かりました。
- 中学校の道德科の授業において、生徒自身が問いをもてるようにすることや、問い続ける姿勢をもてるようにすることを大切にされていることが、お二人の実践から伝わってきました。大変参考になりました。
- 生徒と教師が対等の探究者であることが深い学びにつながるという実感は、とても大切だと感じました。
- 考える続ける姿勢を育てる道德授業が、印象に残りました。「50分の授業で完結しない」というのは、まさに中学校の大切なところだと感じました。
- 学習指導過程に「『生き方への問い』を子ども自身が考える」ということを取り入れているのが小学校籍の私にとっては刺激的でした。
- 橋本先生、増田先生が明確な指導観をもって授業実践を積み重ねているところと高宮先生の人間としての生き方を深める学習を学会としてどう考えていくのかというコメントが印象に残りました。

授業実践の見どころ：進行を通して

島 恒生（畿央大学）

教科化から5年目を迎える中学校では、教科化以前に比べて週1時間の道德科の時間は確実に行われるようになるなど、量的な改善は図られています。ただし、質的な改善については、今なお、課題となっています。

今回は、中学校の道德科の目標の中から、発表1の「橋本実践」では「人間としての生き方についての考えを深める」問いを

創る授業の工夫を中心に、発表2の「増田実践」では、生徒が「多面的・多角的な考えを深める」過程やそのための工夫を中心に、実践報告をしていただきました。そして、思春期の真っ只中の生徒にとって魅力的な授業を展開するための、中学校ならではの授業の在り方や進め方について議論を深めました。

まず、「橋本実践」は、道德科の学習は、生徒が「生き方の問い」を考え、生き方を問うことが道德性の育成につながるものであるとの考えがベースにあります。実際の授業は、まず生徒自らが教材から「問いⅠ」を創ります。これによって生徒は登場人物の生き方に関心をもち、価値理解を図ります。また、同時に、問いの生成力も向上させます。さらに、問いⅠでの追求によって自分の生き方に触れ、その深まりを基に、今度は生徒個々が人間としての「生き方」を問う内省の「問いⅡ」を創ることで、自分事の意味理解や自己の生き方を問い続けるという実践でした。

一方、「増田実践」は、多面的・多角的な考えを「深める」とは、生徒が互いの考えを聴き、自分の中で過去の自分の考えと今の自分の考えをつないで、これからの自分の考えを創っていくことであると考えています。つまり、新たな疑問や課題に対してこれまでに学んだことを取り出し、活かしながら考え続けることです。そしてそれは、50分の授業内で完結するものではなく、休み時間の会話や道德学級通信などを活用しながら、新たな「問い」を考え続ける姿勢を育てるという実践でした。

まとめ

高宮正貴(大阪体育大学)

Ⅰ 「いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢」を養う授業

今回のセミナーのテーマは「中学校の道德科の授業づくり」でしたが、橋本会員と増田会員のお二人の授業は、まさに中学生にふさわしいものでした。それは、「いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢」(『学習指導要領解説 特別の教科道德編』)を養う授業だったからです。東風安生会員の当日のご発言を借りるならば、「ネガティブ・ケイパビリティ」(不確実なものや未解決のものを受容する能力)を育む授業でもありました。この姿勢や能力は小学生にも必要でしょうが、大人に近い中学生にはより切実に求められる資質と言えるでしょう。

橋本会員の場合、教材を通して生徒が価値理解を深めるための「問いⅠ」に加えて、価値理解の深まりを基にして人間としての自己の生き方を直接問うための「問いⅡ」を作らせる授業でした。ただし、単に問いを作らせればよいというのではなく、「問いのオリエンテーション」や「問いのリフレクション」によって、問いの生成力を高めるという提案がなされました。

増田会員は、道德授業は「50分の授業内で完結するものではない」として、授業前と授業後の生徒へのアプローチを工夫されていました。授業前には、過去の授業で出た意見を本時の授業で提示するなど、過去の学びと現在の学びをつなげる工夫がありました。授業後の工夫としては、後日さらに自分の考えを書く、学習管理システムで授業後にも考えを投稿する、授業中に意見を学級通信(道德通信)で紹介する、などの仕掛けがなされていました。もちろん、授業そのものが充実していたからこそ、授業が終わっても生徒が自然に話し合う姿が見られたことを指摘しておかねばなりません。

2 今後の課題

セミナー当日の発表と議論を通して、本学会としても今後検討していくべき課題が見つかったと思います。箇条書きで挙げてみます。

- ①「自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習」とは、どのような学習なのか。また、自己の(人間としての)生き方についての考えを深める学習指導過程とはどのようなものか。
- ②橋本会員の「問いⅡ」を授業の最初の時点でいきなり考えても深まらなるとすれば、「問いⅡ」をより有効に活かすための教材や授業の条件とは何か。
- ③道德的諸価値についての理解を深めることと、自己の生き方についての考えを深めることは、どのように関係するのか。
- ④「自我関与」「自己を見つめる」「自分事」などの言葉はそれぞれ何を意味し、それぞれ授業のどんな在り方を示しているのか。